

『一枚起請文』註釈書の系統分類について

加藤良全

はじめに

『一枚起請文』は法然上人（一一三三―一二二二、以下敬称略）が亡くなる二日前、建暦二年正月二十三日に著述されたものとされ、この『一枚起請文』に対する註釈書は数多く存在する。註釈書に関しては、既に藤堂恭俊氏が「一枚起請文註釈書一覧表」^{〔1〕}を作成されているが、この一覧表は五十音順に配列されたものである。そこで、本稿では藤堂氏の一覧表を基盤として、それらを宗派別と年代順に分類し整理を行った。（附録参照）^{〔2〕}宗派別の著作数を表示すれば次のようになる。

浄土宗五十二本。

浄土宗西山派十本。

浄土真宗本願寺派十一本。

真宗大谷派三十一本。

真宗高田派四本。

真宗仏光寺派一本。

天台宗五本。

高野山真言宗二本。

真言宗豊山派一本。

不明^③四十三本。

註釈書の数量に関して述べると、浄土宗が五十二本と一番多いことは法然を元祖としている浄土宗なので当然であるが、三十一本と多い数量で真宗大谷派の著作が存在する。特に香月院深勵（一七四九―一八一七）の『一枚起請文講義』以降一八〇〇年代において多くの註釈書が存在する。これは同時期の浄土宗と比較しても多い数と言える。さらに詳細に考察すると、真宗大谷派の講師職・擬講師職の者が多数著述し、この真宗大谷派において一八〇〇年頃の註釈書は講義や講説等が多数ある。これはその年代では、真宗大谷派の僧（特に講師職・擬講師職の者）が勉強・布教のテキストとして『一枚起請文』を取り上げていたことが窺える。^④

全体的には、聖岡（一三四一―一四二〇）の『一枚起請之註』が嚆矢であり、その後は聖岡の弟子聖聡（一三六六―一四四〇）が『一枚起請見聞』を著述しただけでその後、江戸時代になってから圧倒的に数量が増加したことがわかる。執筆年代、著者の生存していた年代を考慮して時代別に分類すると、室町時代は二本、江戸時代は一二一本、明治時代は九本、大正以降は五本と、江戸時代が約九割をしめている。

そこで本稿では江戸時代に『一枚起請文』の註釈書がなぜ飛躍的に増加したのかということに関して検討してい

きたい。この註釈書の中には、ある註釈書に影響されたり、あるいは批判の為に著述されたものもある。この事を追っていき江戸時代の『一枚起請文』の捉え方や註釈書の相互関係を考察して行く。その中でも注目すべきものをいくつか取り上げる。

一 『一枚起請之註』『一枚起請見聞』の流布

初めに、室町時代ではあるが江戸時代の註釈書の増加のきっかけとなる聖岡の『一枚起請之註』と聖聡の『一枚起請見聞』に関して述べる。この二本が世に広く認知されるのは龍哲（? - 一六七六）の功績によるものである。龍哲は寛文四（一六六四）年に『一枚起請之註管解』を執筆し、この書物において『一枚起請之註』を詳細に解説している。この後に『一枚起請見聞』も付属してその奥書には執筆の経緯が次のように述べられている。

右了譽西譽二師所撰一枚起請鈔者余於關東寫得之了譽註者世希有之矣西譽見聞者世多有之然傳寫之誤不可舉數於是聚衆本凡九部參考校正蓋恐家醜之發於外也余嘗欲註一枚起請乃以二師抄爲本說故今以二師抄先付之梓傳於世云

ここでは、龍哲がかつて「一枚起請文」を註釈するにあたって、関東でなかなか手に入らない『一枚起請之註』と、手に入りやすい『一枚起請見聞』とを写すことができたが、共に誤字が多いために両本を校訂作業した、と記されている。この龍哲の作業により、『一枚起請之註』『一枚起請見聞』の存在と、浄土宗の『一枚起請文』の理解とが

広く浸透した。⁽⁶⁾ この龍哲の作業以降、『一枚起請之註』『一枚起請見聞』解釈に対して批判や肯定する註釈書が多数執筆された。よつてこの龍哲の作業こそ江戸時代の『一枚起請文』興隆のきっかけであり、註釈書増加の一端を為したといえる。

二 靈空『一枚起請旁觀記』に対する註釈書

次に、天台宗の靈空（一六五二―一七三九）が『一枚起請旁觀記』を著述したことを契機として浄土宗僧が註釈書を著述している。これは先に述べた龍哲以降に起こった『一枚起請之註』『一枚起請見聞』解釈に対する批判や肯定する註釈書に関するものである。この事に関しては、既に福原隆善氏が「靈空の『一枚起請旁觀記』の著作目的は、「了普ナド」の義に対する批判を通じて、天台宗における理解を示そうとしたと見ることができ。」と述べている。⁽⁸⁾ さらに福原氏は、「靈空の『一枚起請旁觀記』が世に出るに及んで、これを浄土門の立場から批判した人に超然があり、『一枚起請疑』一卷、『一枚起請新記』一卷を著して靈空に対した。また次に素信があり、『一枚起請旁觀記』二巻を書いて批判に対抗した。素信にはこのほか、『一枚起請旁觀記』一卷、『一枚起請述讚』一卷があり、靈空の批判に対し、了普聖岡などの浄土門を擁護する立場から著述している。」と述べている。⁽⁹⁾ また、福原氏は敬首（一六八三―一七四八）の『一枚起請親聞録』も『一枚起請旁觀記』を批判しているとしている。⁽⁹⁾

この他にも徳歸（寶永年中の人）の『一枚起請廢立鈔』においても『一枚起請旁觀記』を批判している。この様に靈空の聖岡等への批判を発端として、超然・素信・敬首・徳歸が註釈書を著述しており、江戸時代にお

ける註釈書の興隆の一端を為した。

三 浄土宗における学僧の執筆

次に江戸時代の浄土宗の中でも著名な学僧が多数執筆している。すなわち、忍激（一六四五―一七二一）・関通（一六九六―一七七〇）・貞極（一六七七―一七五六）・義山（一六四八―一七一七）・法洲（一七六五―一八三五）等が挙げられる。これらの著名な諸師が『一枚起請文』を註釈した理由を探索。

先ず、忍激は『吉水起請諺論』を執筆しているが、その経緯が『獅谷白蓮社忍激和尚行業記』（巻下）、に次のように述べられている。

勢州蓮華溪。梅香寺。寅載上人。（中略）一日。寄_三師書曰。宗祖大師。終焉誓書。世謂一枚起請是也。辭約義深古今爲_二此解_一者。已五六家學者未安其說。師胡不爲之解。發揮吉水之正意。振起宗門之眞風耶。敢請通解。師屢固辭。上人疊_レ書。懇請不輟。師感_二其篤誠_一。遂述吉水遺誓諺論一卷。⁽¹⁰⁾

ここでは、伊勢蓮華谷寅載が当時『一枚起請文』の正統な解釈が定まっていなかったとして、忍激に『一枚起請文』の通解を請い、それに応じて忍激が『吉水起請諺論』を執筆したと述べられている。

次に義山の著書『一枚起請辨述』に関しては一日目の講録の最後を締めくくって、記録した者は次ように述べている。

上來は俗化講錄終正徳元卯天七月十日京都に於て義山和尚講之一二日にして終也⁽¹⁾

また二日目の講録においても次のように述べられている。

凡そこの一紙の趣き上人の御素意只是れ末世の邪義を防かんかために如_レ是示し給ふ也⁽²⁾

今時はこの理に背きて種種に妄説を巧み邪見を傳ふその説紛紛として巷に滿つ願くは早く止_レ邪可_レ勵_レ正也⁽³⁾

粵に淨業の沙門義山和尚京都華頂蘭若に寓して道俗に通して起請文の次第を悉_ク和解_メ勸_メ化_シ之_ヲ云云時元文元辰
五月上旬書寫之畢⁽⁴⁾

ここでは、同時に『一枚起請文』の邪説が蔓延していたために、義山が道俗に和文をもつて講述したとされている。
次に関通の著書『一枚起請文梗概聞書』に關しては『関通和尚行業記卷之下』と『一枚起請文梗概聞書』において次のように述べられている。

『関通和尚行業記卷之下』

芝山正二位黃門重豐卿はあつく師の教道に歸し。日課念佛を誓受し。單信無二に稱名したまふ寶曆四年師轉輪寺において。この卿の請によりて。元祖大師の遺誓を。講談せられけるとき。日日講筵にまうで聞にしたがひて筆記し。益を無窮にほどこし。受教の恩蔭に報ひんとて。後日それを梓に壽したまふ。一枚起請梗概聞書これなり。¹⁵

『一枚起請文梗概聞書』

且く八門の梗概を談じて。粗一途の所歸を知しめんと欲す。されば本文をふかくもむつかしくも云なさずして。たださらさらと讀たるばかりにて心得ること。大師の素懷にてこそあらめ。中なか異解を逞して。廣く沙汰しなば。一紙の本意を失卻せん。恐るべし慎むべし。¹⁶

ここでは、黃門重豐卿の請いによつて、関通は『一枚起請文』の本意とは異なる解釈が行われているので、平明な解釈を心がけながら、科文に八門を設けて『一枚起請文』を解説したとされている。

次に法洲の著書『一枚起請講説』では的門が執筆した『一枚起請講説』の跋において次のように述べられている。

今時竊^カ視^ル下^ニ世^ノ之^ノ綱^ヲ淨業者流^ト而説法度生^{スル}者茫乎^ト不^レ辨^ニ聖淨難易^ヲ不^レ知^ニ自他廢立^ヲ或^ハ同^シ轍^ヲ不生^ノ異流^ニ或^ハ混^ニ言^ヲ一念邪義^ニ（中略）長之萩藩教安寺單譽和尚榮周院相譽和尚梅岸寺千譽和尚者慨嘆之餘屢就^テ吾師父還源老人^ニ請^ス下^ニ救^ヲ宗教^ノ之^ノ弊^ヲ以^テ援^ニ中^ニ正路^ニ上^ニ。¹⁷

ここでは、当時の浄土宗の布教が他宗の教義と混説していたため、萩の教安寺单譽、榮周院相譽、梅岸寺千譽の三人が法洲に規範となる説教の作成を要請し、法洲が『一枚起請文』を講述したのが『一枚起請講説』であるとされている。

以上のように、当時『一枚起請文』が本来の意義とは異なる解釈がされて、定まった解釈がなされていないかったのを嘆いた周囲の人が著名な学僧に依頼して『一枚起請文』の註釈書が執筆されたことが判明した。これは江戸時代というのが、浄土宗の組織化が進行する時期であり、教義のバラつきを修正する必要があったことから、元祖の教えの要でもある『一枚起請文』を著名な学僧に註釈してもらい浄土宗の教義を確立していったと考えられる。

おわりに

『一枚起請文』の註釈書を宗派別と年代順に整理した結果『一枚起請文』の註釈書が江戸時代になって飛躍的に増えている事がわかった。その江戸時代に増えた理由として、四点が挙げられる。第一は、龍哲によって校訂された『一枚起請之註』『一枚起請見聞』の流布である。特にそれまで知られていなかった『一枚起請文』註釈書の嚆矢である『一枚起請之註』を広く知らしめたことにより、その後の註釈書にも大きな影響を与えた。第二は天台宗の靈空が『一枚起請旁觀記』を著述したことを契機として浄土宗僧が註釈書を著述したこと。『一枚起請旁觀記』では聖岡等への批判をしたので、浄土宗西山派の超然、浄土宗の素信、敬首、徳歸が聖岡等の説を擁護して『一枚起請旁觀記』を批判する形で註釈書を著述した。第三は浄土宗の学僧の執筆。当時まだ解釈にばらつきがあった中でその時代の学僧がそれぞれ浄土宗としての解釈を確立したことによるものである。第四は真宗大谷派の僧（特に

講師職・擬講師職の者」が勉強・布教の資料として『一枚起請文』を取り上げていたこと。以上の点が重なり、『一枚起請文』の註釈書作成は江戸時代に興隆したのである。

一時代、宗派を超えて諸師が『一枚起請文』の註釈書を執筆している。『一枚起請文』研究においては、この諸註釈書の一つ一つ丹念に繙く必要がある。今後は諸註釈書の記述について研究を進めていきたい。

註

(1) 小川龍彦『一枚起請文原本の研究』(国書刊行会 一九八四年五月)の附録に掲載。

(2) この分類は藤堂稿で掲載されているものであり、これ以降も現在まで藤井実応『法然上人と一枚起請文 法然上人のご遺訓』(大東出版社、一九八六年)、藤堂恭俊『一枚起請文のこころ』(東方出版、一九八七年)等の多数の『一枚起請文』の解説書が存在する。

(3) 著者不明の註釈書と、宗派が特定できない著者を不明とした。

(4) 講師職に就いて『一枚起請文』の註釈書を執筆したのは慧空、慧然、慧琳、慧敵、深励、宣明、寶景、大含である。また、擬講師職に就いて『一枚起請文』の註釈書を執筆したのは靈曜、澄玄、大鐵、知現である。

(5) 『一枚起請見聞』(一六六四年刊) 一九丁表

(6) 寛文四年(一六六四年)の『一枚起請之註』と『一枚起請見聞』は龍哲が出版したものである。

(7) 「ナド」といつているのは聖聡等のことである。

(8) 福原隆善「近代における『一枚起請文』研究の動向」(『浄土宗学研究』九 一九七六年)

福原隆善「近代における『一枚起請文』研究の動向」(2)(『浄土宗学研究』十一 一九七七年)

『一枚起請文』註釈書の系統分類について

- (9) 敬首の批判について福原氏は「近代における『一枚起請文』研究の動向」(『浄土宗学研究』九 一九七六年)において、『一枚起請親聞録』の以下の箇所を挙げている。

上人ノ意ハ断惑章理ノ為即身成仏の為ナラバ、観念観法種種ノ甚深ノ法門シカルベシ。今ハ往生極楽ノ為ナリ。往生極楽ノ為ニハ南無阿弥陀仏ト申外ニ別ノ子細ナシトナリ等ト。今謂ク、此起請文スデニコレ大漸ノ期ニ臨ミ示シ給フ所ナレバ、近ク一宗ノ中ノ安心門化他門ヲ弁別シタマヘル者ナリ。何ゾ遠ク聖道ノ行ニ簡別シタマハンヤ。

- (10) 『浄土宗全書』十八卷 三四頁
 (11) 『浄土宗全書』九卷 一三〇頁
 (12) 『浄土宗全書』九卷 一三一頁
 (13) 『浄土宗全書』九卷 一三二頁
 (14) 『浄土宗全書』九卷 一三七頁
 (15) 『浄土宗全書』十八卷 二五七頁
 (16) 『浄土宗全書』九卷 一五一頁
 (17) 『浄土宗全書』九卷 三一頁

〔付記〕

本稿は平成二十六年十二月二十四日に行われた佛教大学仏教学会学術大会において口頭発表したものである。その場で田中典彦先生、市川定敬先生からご指摘頂いた点も加味し加筆、訂正した。ご指導頂いたことを記し感謝申し上げます。

【附録】

一枚起請文註釈書系統分類表

本資料の製作は一枚起請文の変遷史を目的とし、宗派別に、執筆順に列挙した。

その際に、現時点では執筆年代が推定できなかったものが存在したが、煩を恐れて列挙の中には併載せずに、別して記載した。これらの資料がどこに位置するものであるかの検討は今後の課題として、今は、成立年代の明らかなものを成立順に列挙した。

A 浄土宗
Aa 浄土宗

Ab 浄土宗西山派

B 浄土真宗

Ba 浄土真宗本願寺派

Bb 真宗大谷派

Bc 真宗高田派

Bd 真宗仏光寺派

C 天台宗

D 真言宗

Da 高野山真言宗

Db 真言宗豊山派

E 不明

凡例

- ① 藤堂恭俊「一枚起請文註釋書目録の作製と撰者考」(『仏教文化研究』第十六号 一九七〇年)を基盤とした。
そのため、この論文で掲載されている註釈書までを取り上げた。
- ② 順番は註釈書の成立・刊行年代順に並べ、成立年代不明のものを最後に置いた。
- ③ 著者不明の註釈書と、宗派が特定できない著者を不明とした。

A 浄土宗

Aa
浄土宗

聖問（一三四一—一四二〇）

聖聰 (一三六六一四四〇)

龍哲（？-一六七六）

演智（一六三三—一七二三）

常譽（延寶年中の人）

快天（元和年中の人）

貞阿（貞享・元禄年中の人）

圓中（元禄年中の人）

忍澂（一六四五—一七一）

徳歸（寶永年中の人）

盤察（？：一七二〇）

義山（一六四八—一七一七）

貞極（一六七七—一七五六）

『一枚起請之註』

「一枚起請見聞」

『一枚起請之註管解』

「一枚起請燕泥」

『科註一枚起請文』

『一枚起請文講述』

「一枚起請鼓吹」

『一枚起請自得鈔』

『吉水起請諺論』

『一枚起請廢立鈔』

「一枚起請拾遺鈔」

『一枚起請辨述』

「一枚起請隨聞記」

『法の道芝』

『一枚起請文十勝』

寛文四（一六六四）年刊

寛文四（一六六四）年刊

寛文四（一六六四）年成立

寛文二一（二六七）年成立

延寶七（一六七九）年刊

天和三（一六八三）年刊行

貞享三（一六八六）年刊行

元禄二（一六八九）年刊

寶永三（一七〇六）年刊

寶永四（一七〇七）年刊

正徳元（一七一）年刊

正徳元（二七一）年成立

正徳四（一七一四）年刊

寶曆六（二七五六）年成立

關通（一六九六―一七七〇）

『一枚起請談話』

寶曆一（一七六一）年刊

素信（享保年中の人）

『一枚起請梗概聞書』

享保七（一七二二）年刊

『一枚起請旁觀記匡解』

享保九（一七二四）年刊

『一枚起請略解』

享保九（一七二四）年成立

『一枚起請述讚』

享保一四（一七二四）年刊

問鑑（一六四七―一七三二）

『一枚起請文和解』

享保一二（一七二七）年成立

敬首（一六八三―一七四八）

『一枚起請親聞錄』

元文元（一七三六）年成立

隨天（延享、明和、安永年中の人）

『一枚起請文輔宗錄』

延享二（一七四五）年成立

大我（一七〇九―一七八二）

『吉水辟邪訓疏』

寛延二（一七四九）年刊

諦忍（一七四一―一八一三）

『一枚起請隨聞記』

安永七（一七七八）年刊

『一枚起請諸說辦斷』

安永九（一七八〇）年刊

因靜（安永年中の人）

『一枚起請諸說辦斷正誤』¹

寛政四（一七九二）年成立

慈雲（寛政・文化年中の人）

『一枚起請勸勵抄』

文化六（一八〇九）写

『一枚消息略抄』

文化六（一八〇九）年成立

隨譽（文化年中の人）

『一枚起請勸信鈔』

文化六（一八〇九）年成立

法洲（一七六五―一八三五）

『一枚起請講説』

天保一〇（一八三九）年刊

信譽水月神應（天保年中の人）

『一枚起請歸源説』

天保一一（一八四〇）年刊

壽山（弘化年中の人）

『一枚起請文玄談』

弘化三（一八四六）年成立

本阿（文久年中の人）

『一枚起請文略話』

弘化三（一八四六）年成立

岸上恢嶺（一八三九―一八八五）

『一枚起請文精決』

文久三（一八六三）成立

宮川順桂（明治年中の人）

『説教』一枚起請文』

明治九（一八七六）年刊

小西存祐（一八八六―一九五五）

『布教文庫一枚起請文講話』

明治四四（一九一一）年刊

藤井實應（一八九八―一九九二）

『一枚起請文講話』

昭和一一（一九四一）年刊

香月乗光（一九一〇―一九七二）

『法然上人と一枚起請文』

昭和三四（一九五九）年刊

林隆碩（一八八四―一九七二）

『一枚起請文のころ』

昭和三四（一九五九）年刊

執筆年代不明

達亮（一七五一―一八二三）

『一枚起請文諸説談正誤』

明譽廓瑩（？―一七五四）

『一枚起請私考』

北條的門（一八〇九―一八八九）

『一枚起請資講』

宗阿（生没年不詳）

『一枚起請竹園説』

『一枚起請勸進鈔』

戒譽（生没年不詳）

『一枚起請文勸信略解』

學信（一七二四―一七八九）

『一枚起請文符合決』

中阿圓智（？―一七〇三）

『一枚起請略話』

Ab 浄土宗西山派

南楚大江（一五九二―一六七二）

『一枚起請抒海』

洞空慈泉（一六四五―一七〇七）

『一枚起請鈔』

謙芳（元禄年中の人）

『一枚起請骨目鈔』

謙芳（元禄年中の人）

『一枚起請贅言』

『一枚起請文添濁』

『一枚吉水遺訓評解續篇』

超然純格（？―一七一七）

『一枚起請釋疑』

超然純格（？―一七一七）

『一枚起請新記』

柴田慈慶（？―一八九二）

『一枚起請新記釋疑』

柴田慈慶（？―一八九二）

『一枚起請採要集』

Ba 浄土真宗本願寺派

陳善院僧僕（一七一九―一七六二）

『一枚起請文講錄』

寛延元（一七四八）年成立

寛永一八（一六四一）年刊

元禄一一（一六九八）年刊

元禄一五（一七〇二）年刊

享保一五（一七三〇）年刊

寶永四（一七〇七）年刊

寶永四（一七〇七）年刊

明治一七（一八八四）年刊

乗相院法賢（一七七〇―一八四九）

『一枚起請文講要』

享和元（一八〇一）年写

『一枚起請文講要輔闕』

享和元（一八〇一）自跋自筆

『一枚起請法賢錄』

文化一三（一八一六）著者奥書

行照（一七九四―一八六二）

『一枚起請文聽記』

安政四（一八五七）年成立

僧鎔（一七二三―一七八三）

『一枚起請文遺語訣』

安政五（一八五八）年成立

『一枚起請鈔』

『一枚起請文記』

花田凌雲（一八七三―一九五二）

『一枚起請文講話』

大正六（一九一七）年刊

執筆年代不明

芳英（一六七三―一八二八）

『一枚起請文丙子錄』

賢篁（生没年不詳）

『一枚起請講要』

Bb 真宗大谷派

慶山（元禄年中の人）

『一枚起請魯編鈔』

元禄一五（一七〇二）年自序

惠曉（一六七七―一七二七）

『一枚起請愚驗記』

享保三（一七一八）年奥書

『一枚起請惠曉説記』

享保八（一七二三）年奥書

傳寂定院慧敵（？―一七九三）

『一枚起請希聞記』

享保七（一七二三）年奥書

香嚴院惠然（一六九三—一七六四）

『一枚起請文聞記』
『一枚起請文仰信義略』

寶曆一〇（一七六〇）年成立

開轍院隨慧（？—一七八二）

『一枚起請文仰信義』
『一枚起請文略解』

明和七（一七七〇）年成立

義圭（？—一七九九）

『一枚起請説藪』

安永五（一七七六）年刊

俊諦（天明年中の人）

『一枚起請文繪抄』

天明二（一七八二）年刊

心畫院慧白（？—一八四三）

『一枚起請文聞書』

寛政九（一七九七）年奥書

香月院深勵（一七四九—一八一七）

『一枚起請文講義』

文化元（一八〇四）年成立

威廣院靈曜（一七六〇—一八二二）

『一枚起請文講説』

文化元（一八〇四）年成立

理綱院慧琳（一七一五—一七八九）

『一枚起請文講義』
『一枚起請文游刃』

文化四（一八〇七）年成立

『一枚起請文温故』

文化一三（一八一六）年写

香雲院澄玄（一七八七—一八五一）

『一枚起請文肯竅』
『一枚起請文稟義』

天保三（一八三二）年成立

『一枚起請文説教』

江戸末期成立

頓成（一七九〇—？）

『一枚御消息復古記』

天保五（一八三四）年刊

『一枚起請文演義録』

天保九（一八三八）年著者奥書

雲華院大含（一七七三—一八五〇）

『一枚起請文講義』

天保一二（一八四一）年成立

大鐵（?―一八二九）

『一枚起請水乳辦』

嘉永四（一八五一）年写

五乘院寶景（一七四六―一八二八）

『一枚起請文聞記』

嘉永五（一八五二）年写

松浦僧梁（一八四一―一九二二）

『一枚起請文備考』

萬延元（一八六〇）年成立

長生院知現（?―一八三五）

『一枚起請文法話』

明治二九（一八九六）年刊

妙音院了祥（一七八八―一八四二）

『一枚起請文隨聞記』

明治四一（一九〇八）年写

『一枚起請文講義』

著作年代不明

西福寺惠空（一六四四―一七二二）

『一枚起請鈔』

『一枚起請要解』

圓乘院宣明（一七五〇―一八二二）

『一枚起請文講義』

Bc 真宗高田派

惠雲（一六一三―一六九二）

『一枚起請鈔』

芳洲秀啓（寶曆年中の人）

『一枚起請文講讃』

竹隱老褐滴普嚴（一七四四?）

『一枚起請請講』

『一枚起請文講錄』

寛文一三（一六七三）年刊

寶曆四（一七五四）年理綱院慧琳序

文化元（一八〇四）年成立

Bd 真宗仏光寺派

玄貞（元禄年中の人）

『一枚起請鼓吹』

元禄一二（一六九九）年

C 天台宗

光謙靈空（一六五二―一七三九）

『一枚起請旁觀記』

天和二（一六八二）年刊

『一枚起請旁觀記釋難』

享保四（一七一九）年刊

『一枚起請骨目鈔驗非』

享保五（一七二〇）年刊

『一枚起請顯非釋』

隆長（元禄年中の人）

『一枚起請但信鈔』

元禄一五（一六九六）年成立

Da 高野山真言宗

諦忍（一七四一―一八一三）

『一枚起請諸說辦斷』

安永七（一七七八）年刊

『一枚起請諸說辦斷正誤』⁽²⁾

Db 真言宗豊山派

惠隆（？―一八一八―一八三〇）

『一枚起請略解』

『E 不明（藤堂論稿に掲載）』

著者不明

『一枚起請抒海講義』

寛文一一（一六七二）年刊

著者不明

『一枚起請假名註』

天和二（一六八二）年刊

著者不明

『一枚起請和談抄』

天和二（一六八二）年成立

信覺（元禄年中の人）

『一枚起請註』

元禄一一（一六九八）年刊

西阿（寶永年中の人）

『一枚起請文撮要』

寶永元（二七〇四）年成立

信慶（元文年中の人）

『一枚起請繼文』

元文二（二七三七）年奥書

繼文（元文年中の人）

『一枚起請文講義』

元文二（二七三七）年成立

忍甲（寛保年中の人）

『一枚起請文述記』

寛保三（二七四三）年奥書

安立寺

『一枚起請文觀講』

寶曆六（二七五六）年成立

如幻快道（明和年中の人）

『一枚起請試解』

明和六（二七六九）年著者奥書

惠天（天明年中の人）

『一枚起請還源要術』

天明七（二七八七）年成立

玄雄薦滿（文化年中の人）

『一枚起請臨講』

文化元（二八〇四）年成立

著者不明

『一枚起請臨講』

文化元（二八〇四）年成立

良誓（弘化年中の人）

『一枚起請文聞書』

弘化二（二八四五）年成立

著者不明

『一枚起請文講義』

文化一四（一八一七）年写

著者不明

『首書漢字一枚起請』

文政三（二八二〇）年写

『一枚起請文講錄』

著者不明

『一枚起請文談林』

文政一一（一八二八）年成立

惇信・薦滿（天保年中の人）

『一枚起請文聴記』

天保六（一八三五）年成立

玄雄・薦滿・教觀講

『一枚起請文聴書』

文久元（一八六一）年成立

蓮華法印（明治年中の人）

『冠註一枚起請文鼓吹』

明治二八（一八九五）年刊

藤谷還由（明治年中の人）

『一枚起請文』

明治四四（一九一一）年刊

谷崎法雲（明治年中の人）

『一枚起請文略解』

明治四五（一九一二）年刊

著者不明

『一枚起請文勸考』（『佛書解説大辭典』大正四（一九一五）年写

鈴木成元編）『一枚起請文註釈書目録』明治四四（一九一一）年写とす

著作年代不明（藤堂稿に掲載）

一向（生没年不詳）

『一枚起請説教』

法道（生没年不詳）

『一枚起請法道録』

忍中（生没年不詳）

『一枚起請迷記』

了雲（生没年不詳）

『一枚起請文岐歸』

恭碩（生没年不詳）

『一枚起請文隨聞』

玄髓録・圓道編（生没年不詳）

『一枚起請文柱礎録』

覺行（生没年不詳）

『一枚起請文聞記』

康樂寺法雲（生没年不詳）

『一枚起請文聞聆記』

喝傳（生没年不詳）

『遺哲略釋』

喚阿（生没年不詳）

『遺誓詳解』

著者不明

『一枚起請科註』

著者不明

『一枚起請講解』

著者不明

『一枚起請講釋聞書』

著者不明

『一枚起請釋難』

著者不明

『一枚起請文講説』

著者不明

『一枚起請文講錄』

著者不明

『一枚起請文日講記』

著者不明

『一枚起請略註』

著者不明

『円光大師一枚起請並由来』

註

（1） 諦忍は高野山真言宗の僧であるが、享保十三（一七二八）年に浄土宗の璽書を承っているので浄土宗・高野山真言宗の両方に分類した。しかし、諦忍自身は『善導大師行状記』において、

予ハ眞言宗ニ非ズ、浄土宗ニ非ズ、唯コレ律宗ナリ。

と、真言宗でもでもないとし、自身を律宗だとしている。

（2） 註（1）と同じ